

緒方洪庵

お が た

こ う あ ん

1810年(文化7年)～1863年(文久3年)

備中国足守(現岡山市北区足守)生まれ

「適塾」を開き近代日本の礎となる人材を育成、天然痘撲滅にも貢献した日本近代医学の祖。

病弱の我が身から選んだ医の道

1810年(文化7年)7月14日、備中

国足守(現岡山市北区足守)に巨星が生まれた。父は足守藩の下級藩士、佐伯瀬左衛門、幼名は章。後に、大坂(現大阪)に「適塾」を開いて近代日本の礎となる人材を育てるとともに、天然痘治療に貢献した当世の蘭方医、緒方洪庵である。

8歳の時、天然痘にかかりながらも一命を取り留めるという身をもつての経験から、幼心に自分も将来は医者にといふ想いを持っていたのである。16歳の時、足守藩の大坂蔵屋敷留守居役となつた父に付いて大坂へ移つた翌年、蘭方医・中大游の私塾「思々斎塾」の門を叩く。天游は医学のほか、物理(物理学)、天文学に長じており、大阪蘭学会を代表する西洋医学の先駆者。その門下生となつた洪庵は、無我夢中で勉学に励んだ。天游の元にあつた間に、当時読むことができた訳書の類はほぼすべて読破したという。入門から4年、勉強熱心な洪庵に大いなる

可能性を感じた天游は、さらなる向学のため江戸行きを勧めた。

江戸へ長崎へ、苦学と向学の日々

1830年(天保元年)、洪庵は江戸に向けて旅立ち、坪井信道が開いていた安懷堂塾に入門。医学やオランダ語を学ぶ。師の信道は苦学力行の末、江戸の蘭医学の大家になった人であるが、信道の元での生活は修業の身ということもあり

窮屈ぶりを見かねて自分の着ている衣服を脱いで洪庵に与えるほどであった。信道は小柄、洪庵は大柄で着物は膝が出るほどであったが、洪庵は気にせず勉学に励んだという。さらに、師の信道の勧めにより、杉田玄白の教え子にして信道の師でもある宇田川櫻斎の門に出入りし、この頃には洪庵の実力はかなりのものになつていたようだ。オランダ語の原書を

読破する一方、数十冊に及ぶ医書の翻訳などを手がけるほどになつて、向学の想いやまない洪庵は、1836年(天保7年)、今度は蘭学の本場・長崎へ遊学し、オランダ人医師のニーマンのもとで医学を学んだとされている。大坂で「適塾」を開くのはその翌々年のことである。

大坂に開いた蘭学塾「適塾」

1838年(天保9年)、洪庵は敬愛する天游先生の想いが遺る大坂で医師開業する傍ら、恩師・天游の「思々斎塾」にあわせて塾名を付けた蘭学塾「適塾」(適々

である洪庵の号「適々斎」)にちなんだ塾名には、「勉学とは、人から押しつけられるものではなく、自分でやりたいものをやれば、自然と成長してゆく」という理念が込められていた。洪庵は決して門人を叱らなかつたといふ。「適塾」は元来、医学・医療を教える塾であったが、門人

は興味のあることは何でも学べる。自由闊達な空気があふれていた。蘭学を通して世界の変化を感じ取つて、世界のことを探つて、世界のことを理解できる幅広い人材を育てたいと考えていたからか、適塾では蘭書の会読に力を注いだ。

史蹟緒方洪庵舊宅及塾



緒方洪庵が開いた蘭学塾「適塾」
(大阪大学適塾記念センター・大阪市中央区北浜)
現在残っている適塾の遺構は、塾開校から5年後の1843年、初代の塾が手狭になつたため、商人の家を買取り移転したもの。



緒方洪庵の肖像

あしたのひと——07



「適塾」の2階では、多くの蘭方医・緒方洪庵の名前が記された碑文や、洪庵の著書が展示されている。また、洪庵の生誕地である今橋の「除痘館」跡(大阪市中央区今橋)では、洪庵の生平や功業が紹介されている。

洪庵は適塾を運営する傍ら、医者としても偉業を成し遂げている。江戸時代、最も恐れられた疫病であつた天然痘を予防する種痘を行なつたのである。

日本で初めて種痘を世に広める

洪庵は適塾を運営する傍ら、医者としても偉業を成し遂げている。江戸時代、最も恐れられた疫病であつた天然痘を予防する種痘を行なつたのである。

近代日本の礎になつた塾生たち

開塾以来、蘭方医・緒方洪庵の名声の高まりとともに、洪庵に教えを請ひたが塾長を務めた25年間の塾生は三千人を

超えていた。洪庵は、そのうちが多数いる。彼らは国元に帰つた後も書簡のやりとりなどで交流を続け、近代日本に向かう知識と行動を広げつたのである。

近代日本の礎になつた塾生たち

適塾に在籍した塾生たちは、多くの分野の本を貪欲に読んだ。判らぬ言葉の意味を探して、適塾に冊子を貰つた「ゾーフ辞書(蘭和辞書)」を奪いあうように利用した。そのため、辞書を置いていた部屋は「ゾーフ部屋」と呼ばれ、明かりが消える間がなかなかつたといわれている。

洪庵は、その間も、洪庵に教えを請ひた塾生は続々と押しかけた。洪庵は、江戸時代、最も恐れられた疫病であつた天然痘を予防する種痘を行なつたのである。

洪庵は適塾を運営する傍ら、医者としても偉業を成し遂げている。江戸時代、最も恐れられた疫病であつた天然痘を予防する種痘を行なつたのである。

1796年、イギリスのジエンナーによつて開発された牛痘接種の痘苗がわが国にたらされた。1849年(嘉永2年)、吉は自伝の中で「凡そ勉強ということについてはこのうえにしようもないほどに勉強した」と述懐しているほどである。

適塾は全国から駆けつけた塾生にあふれ、談論風発の塾風はその後の明治維新の激動の中、日本の近代化に大きく貢献した多くの人材を輩出している。時代を創立した教育者・福沢諭吉をはじめ、明治政府における初期の陸軍政策を担つた大村益次郎、東京医学校(現東京大学医学部)校長を務めるなど日本の医学界に大きな功績を残した長与専斎、明治新政府の官僚として工業の近代化に貢献した大鳥圭介、「同愛社」を創立し窮民医療に尽くした高松凌雲ら著名な面々ばかりでなく、全国各地で医療などの近代化を支えた塾生たちが数多い。彼らは国元に帰つた後も書簡のやりとりなどで交流を続け、近代日本に向かう知識と行動を広げつたのである。

1796年、イギリスのジエンナーによつて開発された牛痘接種の痘苗がわが国にもたらされた。1849年(嘉永2年)、洪庵は種痘所(後に「除痘館」と改称)を大坂に設立。牛痘種痘法による切痘を世に広める活動を大坂から開始したが、その事業は苦難の連続であった。

当初は種痘に対する世の中の理解が低く、種痘をすれば牛になる等の迷信がはびこっていた。人々に種痘を受けてもらうことさえ難かしかつたのである。

しかし、洪庵らはそうした誤解や悪評に屈することなく、当初は治療費を取らざる患者に種痘を勧め、関東から九州まで186カ所の分院所を設立。そこで、設立から足掛け10年後の1858年(安政5年)、「除痘館」はようやく幕府に認められ、日本初の公的な種痘施設になつたのである。

また、除痘館が公認された安政5年は、コレラが大流行した年。この時、洪庵は過労で体調を崩しながらも懸命に患者を診察し続け、同時に、コレラ治療に関する手引書「虎狼痢治準(こりりちじゆん)」を出版して医師らに無料で配布している。攘夷が開国だと騒がしかつた幕末の世情の中、それに動搖することなく、自らのやるべき医業にどかりと腰を据えて取り組んだのである。



「除痘館」跡(大阪市中央区今橋)